

モバイル100メガ時代が到来

キャリア4社のLTE戦略

この秋のソフトバンク、KDDIのLTEサービス開始で、日本の携帯電話市場は新たなフェーズに突入する。LTEの本格展開で携帯電話市場はどう変わるのか。携帯4社の直近のLTE戦略を見ていく。 文◎藤井宏治(IT通信ジャーナリスト)

100Mbps超の高速データ通信が可能な次世代ケータイLTE (Long Term Evolution)の展開が、今秋からいよいよ本格化する。

ソフトバンクは、今年2月から傘下のWireless City Planning (WCP)を通じて展開しているTDD方式^{*1}のLTE (TD-LTE、日本での規格名称はAXGP)に加え、秋から自社のネットワークにもLTE (FDD方式^{*2})を導入する計画だ。KDDIも今年12月としていたLTEの導入を、9月に前倒しする。

LTEの商用サービスは、2010年12月からNTTドコモが、今年3月にはイー・アクセスがそれぞれスタートさせており、この秋4社のサービスが出揃うことで、日本の携帯電話市場

は新たなフェーズに入ることになる。携帯各社のLTE展開の狙いと、LTEの導入が市場に及ぼすインパクトを見ていく。

速度と料金でシェアを回復

LTEは、現行の第3世代携帯電話(3G)の後継となる新たな移動通信システムだ。

周波数利用効率が3Gの2~3倍と高く、同じ5MHz幅の電波(搬送波)で3G(W-CDMA)の2倍以上、下り最大37.5Mbpsの高速データ通信を実現できることが大きな特徴だ(搬送波幅はFDD方式の上り、下りの片方向分で表記、以下同)。帯域幅を広げることにより10MHz幅で75Mbps、15MHz幅で112.5Mbps、

最高スペックの20MHz幅では150Mbpsまでの高速データ通信に対応できる。伝送遅延が小さくVoIPなどのリアルタイム性の高いアプリケーションに対応できることも大きな進化点だ。

携帯キャリアがLTEの導入を進めるのには、大きく2つの狙いがある。1つはスマートフォンの普及で爆発的に増大する3Gのデータトラフィックを、周波数利用効率の優れたLTEにオフロードさせること。もう1つが、サービス競争力を向上させ、顧客獲得競争を有利に進めることだ。

イー・アクセスが3月に開始した「EMOBILE LTE」は、後者を強く意識したものといえる。

07年に携帯電話サービスに新規参入したイー・アクセス(当時はイー・モバイル、2011年の経営統合で現社名に)は、3G(HSPA)によるデータ通信サービスを比較的安価な定額料金で提供、開業5年で400万の加入者を獲得している。

だが、09年にKDDI系のUQコミュニケーションズが下り最大40Mbpsのデータ通信が可能なモバイルWiMAXでモバイルデータ通信に参入し、2010年末にはモバイルデータ通信に力を入れるドコモがLTEを導入するなど競争が激化した。1年ほど前から加入者の伸びが鈍化してきた。

図表1 携帯4社の2012年度下期のLTE展開計画

	NTTドコモ	イー・アクセス	ソフトバンク	KDDI
開始時期	2010年12月	2012年3月	2012年9月	2012年9月
最大通信速度(下り)	75Mbps(東名阪地区) 112.5Mbps	75Mbps	37.5Mbps (AXGPは110Mbps)	75Mbps
運用周波数帯	2GHz帯 800MHz帯 1.5GHz帯	1.7GHz帯	2GHz帯 (AXGPは2.5GHz帯)	800MHz帯 1.5GHz帯 2GHz帯
2013年3月末の人口カバー率	70%	70%	非公表	96% (実人口カバー率)